

ゴーストドラム

THE  
GHOST  
DRUM

SUSAN PRICE

THE GHOST DRUM

THE GHOST DRUM

スーザン・プライス

金原瑞人 訳

ゴーストドラム

# THE GHOST DRUM

SUSAN PRICE

スーザン・プライス

金原瑞人 訳



THE GHOST DRUM



THE GHOST DRUM



THE GHOST DRUM

by Susan Price

Copyright © 1987 by Susan Price

Japanese translation published by arrangement with Susan Price c/o A M Heath & Co Ltd  
through The English Agency (Japan) Ltd.

おじ、レオン・スタニスワフ・ヘスの思い出に捧げる

もくじ

第一章	冬至の夜	6
第二章	皇帝の後選び	13
第三章	三つの魔法	33
第四章	孤独な皇子	47
第五章	牢獄からの解放	65
第六章	ガイドン皇帝の死	79
第七章	森の兵士	97
第八章	女帝とクマ	114
第九章	ヴァーニャの夢	120
第十章	クズマの勝利	124
第十一章	鉄の森	135

第十二章 女帝と幽霊……………143

第十三章 チンギスとクマ……………149

第十四章 氷のリング……………158

第十五章 巻き終わった金の鎖……………170

日本の読者の皆さんへ……………178

【改訂版】訳者あとがき……………179

## 第一章

# 冬至とうじの夜

あなたが今いるところから、はるか彼方かたの湖のそばに立っているのは、一本のカシの木。

そのカシの木の幹みきに巻きついているのは一本の金の鎖くさり。

その鎖につながれているのは一匹びきの猫ねこ。それも世界中でいちばん物知りの猫。猫がいつもぐるぐる歩きまわっているのは、一本のカシの木のまわり。

あちらにいつては歌い、

こちらにきては語る。

その猫の語る話のひとつが、これ。

これは（と猫は語る）、はるか遠く、皇帝こうていがおさめている国の話。その国では、冷たく暗い冬が一年の半分。

雪は深く積もり、いつまでも解けることなく、解けないままに凍てついて氷になる。クマが上を歩いてもびくともしない。凍った雪の表面の輝きは、さながら白い空の白い星！この国の北の地方では、冬は長い長い一夜。その長い夜の間、空の星は闇の中で輝き、雪の星は白さの中で白く輝き、天と地の間には、寒々しい薄明かりが震えながらカーテンのようにたれこめている。

この地方の冬の寒さはすさまじく、空から降る雪が碎けるような、弾けるような音を響かせる。雪は深く積もり、どの家も雪になかば埋れ、凍てついた雪は万力のような力で家を握りしめ、家はかん高い悲鳴をあげる。

この話は（と猫は語る）、この遠くの国の冬至の日に始まる。一年で最も短く、最も暗く、最も寒い昼が終わると、次には最も長く、最も暗く、最も寒い夜が待ちかまえている。この昼とも夜ともつかない、夜とも昼ともつかない日に、ひとりの奴隷女が赤ん坊を生んだ。

その女は夫の家族といっしょに、小さな木の家に住んでいた。家の真ん中にはれんが造りの大きな大きな箱型のストーブがひとつ。日がな一日、ストーブの火はたきつがれ、その熱はれんがにしみこんでいった。一日中、そして一晩じゅう、れんがはその熱を家の中にはき出している。

夜になると家族はみんなストーブの上に毛布を広げ、そこで眠る。女は家族といっしょにストーブの上で疲れた体を温めながら、赤ん坊を抱いて横になっていた。

家の中で目をさましているのはその女ひとり。夜はますます冷えこんできた。

奴隷女は横になったまま、かすかな音を耳をすましていた。ひびわれたコップのうなりのような音、それはストーブが温かい息を吐き出す音だ。まわりでは、みんなの深い寝息がさざめいている。雪が屋根を



かむ音が響いている。

「ああ、わたしが皇帝の娘に生まれていたら―」女はひとりごとをいった。「そうすれば、この子も皇帝の孫娘、豊かで暖かい世界で無事に暮らせるだろうに……でもわたしは奴隷の娘。この子も奴隷。自分の身さえ自分のものでない女奴隷―」

そう思うと、悲しくて涙がこぼれた。「こんなにつらい思いをして、ロバのように苦しみながら、この子を産んだのも、皇帝陛下のためにロバを一頭産んだようなもの。陛下の思いのままに、働かされ、けられ、売られるロバ同然。こんなことなら、わたしもこの子も生まれてこないほうがよかった―」

そのとき、何かが家の表の戸を打った。打たれた戸は、低い声をあげた。家の暖かい空気が、屋根の梁の間で、壁のそばで、震えた。女はびくりとしたが、そばで眠っている者たちはだれひとり寝息をみだすこともない。

外で、凍りついた雪がきしり、しゃがれ声をした。「入っていいかね？ ほら、その人、どうなんだい……入っていいかい？」

家族の者たちは気づかず、眠ったまま。まるで外で戸をたたいた人間は女の夢に、女の夢の中にだけいるかのようだ。

また戸が低い音を響かせた。女は大声でいった。「お入りください。よくいらつしやいました」そういうしかない。雪の中、道に迷った旅人が宿をもとめているのかもしれない。

表の戸が開いて、びしゃりと閉まる音がした。女は頭をあげて、ストーブの上からそちらに目をやった。いきなり部屋の戸が開いて、背の高い人影がとびこんできた。毛皮の大きな帽子と長いコートにすっぽり

包まれている。コートは綿をつめたキルトで、風変わりな模様の刺繍がしてある。ビーズで模様を縫いこんだごつい毛皮のブーツに、大きな毛皮の手ぶくろ、肩には平たい太鼓をかけている。

背の高い、奇妙な人影は部屋を横切つてストープの上にあがると、若い母親のそばに座つた。家族は寝ていて、だれも目をささない。旅人が手早く毛皮の帽子を取ると、年老いた女の顔が現れた。しわくちゃの顔は、握りしめた極上の古い革のようだ。あごのあたりからは細く白いひげがはえている。だが白髪からすけてみえる地肌はきれいなピンクだ。この小さく暖かい家の中で、老婆がキルトの分厚いコートの前を開けると、革の上着がのぞいていた。上着にはビーズと鳥の羽根飾りがついていて、老婆は大きな手ぶくろをはずし、若い女にほほえんだ。老婆の口には、黒か茶色の歯がまばらに並んでいる。

「こんばんは」老婆が声をかけた。「あんたにすばらしい娘が生まれたのを祝うために、はるばる寒い道をやってきたんだよ」

女は赤ん坊をしっかりと抱きしめた。この老婆は魔女にちがいない。魔女というのは、こんなふうには夜やつてきて、赤ん坊をぬすんで、焼いて食べてしまふのだ。女は家族の者の名を呼んだ。だれかが目をさまして、この夢から起こしてくれないか、夢でないなら、だれかが目をさまして、この魔女を追い払つてくれないかと思つたのだ。だがみんな、何もきこえないかのように眠っている。

「娘や娘、こわがることはない」老婆がいった。「おまえやおまえの赤ん坊に悪いことをしてきたわけじゃない。いつておくことがあつて、やってきたんだよ。おまえが腕に抱いている赤ん坊が生まれてくるのを、あたしは百年も待つていたんだよ」

女はふと口を開けた。まるで老婆の言葉を味わおうとでもいうように。

この赤ん坊が生まれるのを百年も待つてた？ この子は何者？ 未来の聖者？ これから百年のちに、たくさんの教会がこの子のために灯されたりそうくて、照らされることになるのかしら。

「その子をあたしにおくれ。あたしに育てさせておくれ。そうすれば、その子は魔力を持つようになり、皇帝の息子に愛されることになるだろう。もしおまえがその子を手元に置いて育てれば、その子は奴隷となり、奴隷の母親となるだけだ。さあ、あたしにおくれ」

女は赤ん坊を抱きしめて、首をふった。

「ほら、あたしの背中にあるのは魔法の太鼓だ。わかるだろう。あたしは魔法使いなんだよ。姿を変えることもできれば、死者のあとについて死者の国に行くこともできる。あらゆる魔法を心得ている、魔力を持った女だ。このあたしも奴隷に生まれたんだよ。あたしが生まれた夜、母のもとに女の魔法使いがやってきて、どうかこの子をおくれ、といったんだ。あたしはその魔法使いに娘として育ててもらい、三百年という寿命をさずかった。そして百年の間、毎日、あたしはこの太鼓をたたいては、霊たちに、いつ、どこで、娘にすべき赤ん坊が生まれるのかたずねてきた。今日がその日だ。おまえの娘が、その子なんだよ。その子をあたしにおくれ。あたしが育てれば、けっしてひもじい思いをさせることはないし、ごごえ死んだり、むごい扱ひを受けることもない。奴隷にならないですむんだ。その子をあたしにおくれ。そうすれば、自由にしてやれる。魔法の力をさずけてやれる」

涙が母親の頬をつたい、首をつたった。「できません。この赤ん坊はわたしのものではないのです。わたしは奴隷です。この子の父親も奴隷です。この子もわたしも夫も、みんなガイドン皇帝のものなのです。もしあなたにこの子をわたせば、わたしも夫も、皇帝の財産を勝手に人にわたした罪で、鞭で打たれます。

皇帝のものを盗んだかどで、死刑になるかもしれないです」

老婆はストーブからとびおりて、部屋の戸まで駆けていった。戸は、老婆が手をふれるまえに開き、老婆の後ろでばたんと閉まった。表の戸が開き、ばたんと閉まる音がきこえた。母親は闇の中で静かに横たわっていた。涙がこぼれた。あの老婆はいつてしまったのだろうか。

ふたたびふたつの戸が次々に開き、次々に閉まった。老婆がもどってきた。手に自分の頭ほどの雪の玉を持つている。そしてストーブの上に腰をおろすと、雪をもむようにして何か作り始めた。雪は解けない。

老婆はたくましいしわだらけの手を、細く骨ばった指をたくみに動かして、雪をこねながら歌った。そのうなるような暖かい声が闇を震わせ、闇の小さなちりがくるくる回りだしたかのようだ。老婆の歌の節は長く尾を引き、屋根の梁と梁の間に吸いこまれていく。若い母親はそれをきいているうちに、気持ちが悪く落ちてきてきた。

老婆は雪で赤ん坊をこしらえた。

「あたしの子どもは、冷たく白い赤ん坊」老婆がいった。「この雪の人形には呪文を吹きこんでおいたから、たとえ火の中に入れても、解けることはない。夏がやってくるまで、解けることはない。あたしがこの子連れを連れていってしまったら、この雪の赤ん坊を家族にみせて、死んでしまったというがいい。だれも驚きはない。冬に赤ん坊が死ぬのは珍しいことではないからね。みんなは雪の赤ん坊を持つていつて埋めるだろう。そうなれば、夏になって解けても、気づく者はない。おまえが罰を受けることもない。奴隷の赤ん坊はきびしい冬の間に死んでしまったのだ。さあ、おまえの赤ん坊をわたして、この雪の赤ん坊を受けとるがいい」

母親は毛布の下から赤ん坊を取り出しはみたものの、まだしっかりと抱いたまま、ためらっていた。

老婆は両手で赤ん坊をかかえようとした。「さあ、ききわけるんだ。その子をあたしにおくれ。それとも、奴隷にしようつもりかい？」

母親は手の力をゆるめた。老婆がその子をしっかりと自分の胸むねにおしつけ、厚いコートの前をとめると、赤ん坊はコートにすっぽり包まれた。老婆は冷たい雪の赤ん坊を母親の腕にあずけた。

老婆はストーブの上からとびおりと、毛皮の帽子をかぶり、大きな手ぶくろをはめ、「幸運を祈いのっているよ」と威勢いせいよく声をかけて、戸のほうに駆けていった。戸がさっと開き、老婆が駆け抜けていった。若い母親は片かたひじをつけて体を起こすと、最後に一目だけでも老婆をみようとしたが、そこには閉まった戸があるだけだった。そして表の戸が大きな音を立てて閉まると、あとは外で、凍てついた雪がみしみし声をあげるのがきこえるばかり。

かかえている雪の赤ん坊はぞっとするほど冷たかった。

夜明けまえ、母親はよくわからなくなっていた。自分は、昨夜やってきた老婆に本当に娘をやってしまったのだらうか？ それとも、今かかえている冷たい赤ん坊が、ここへ死んでしまった本当の赤ん坊で、あとはすべて夢だったのだらうか？

わからなくなってしまうた母親は、だれにも老婆のことはいわず、はじめての赤ん坊は女の子だったが、生まれてから何時間もしないうちに、冬の夜の寒さのために死んでしまった、とだけいった。だが女はみじめな一生を送りながら、死ぬまで老婆のことを忘わすれなかった。そして、どうかあれが夢ではありませぬように、と願っていた。